

韓国語訳『源氏物語』についての一考察*

－古典文学翻訳の在り方と底本の問題をめぐって－

権妍秀**
yysue@naver.com

<目次>

- | | |
|---------------------------------|------------------------|
| 1. はじめに | 3. 韓国語訳『源氏物語』の翻訳上の諸問題 |
| 2. 韓国における『源氏物語』翻訳の現状 | 3.1 韓国語と日本語間の翻訳における諸問題 |
| 2.1 韓国語訳『源氏物語』の出版状況(2013年12月現在) | 3.2 翻訳と底本テキストの諸問題 |
| 2.2 韓国語訳『源氏物語』の書誌と底本 | 4. おわりに |

主題語: 源氏物語(Genji Monogatari), 韓国語訳『源氏物語』(Korean translation for “Tale of Genji”), 源氏物語の現代語訳(translation for “Tale of Genji”), 古典文学翻訳(translation of classical literature), 韓国語と日本語間の翻訳(translation of Japanese between the Korean), 翻訳と底本テキスト(translation and original text)

1. はじめに

平安時代に書かれた『源氏物語』がこれまで読み継がれてきた歳月は、実以て千年にのぼる。それだけ長い間享受された『源氏物語』は、これまで日本の様々な階層の人々によって様々な「読み」を生み出してきた。そして現代日本語や外国語に翻訳される形でさらなる享受の幅を広げ、現代においても新たな読者を開拓しつつ世界の人々に読み継がれている。その『源氏物語』が初めて外国語に翻訳されたのは、明治時代に官僚としてイギリスに渡った外交官・末松謙澄による抄訳『Genjimonogatari』¹⁾であった。その英訳が1882年イギリスで出版されてから130年、『源氏物語』は今なお世界中の様々な言語で翻訳されている。海外における日本文学事情に詳しい伊藤鉄也氏の調査によれば、2013年現在刊行されたものとして31の言語による翻訳が確認されており、漫画の翻訳や翻訳進行中のもの、未確認のもの

* This work was supported by campus research funding grant of Semyung University

** 世明大学教 日本語学科 副教授

1) 末松の英訳は『湖月抄』を底本としているが、桐壺巻から絵合巻までで完訳ではない。末松の英訳について井上英明氏は、「北季吟以上の新見はない」ものの、「源氏物語の物語性を海外の読者に強く印象づけたことで意義深い」と評している。(1989 : p.367)

まで合わせると36の言語にのぼるということである²⁾。但し、この調査は国別、より正確に言えば言語別の翻訳状況を調べたものである。したがって、ここに提示される翻訳種類の数字は『源氏物語』が翻訳された言語の数であって、翻訳本の数ではないことに注意したい³⁾。

翻訳という視座から考えると、『源氏物語』が世界文学として評価されるようになったことにおいて、イギリス人東洋学者のアーサー・ウェイリーの英訳によるところが大きいこと論を俟たない。文学的な才能に満ちた秀麗な訳文と評価されるウェイリーの英訳は、王朝文化に支えられた作者の芸術観を賛歌してやまないヴァージニア・ウルフをはじめ当時のヨーロッパ文壇にも少なからぬ影響を与えた⁴⁾。天才とまで言われるウェイリーの英訳『The Tale of Genji』は、明治期に入り近代文学者によって原著よりもすばらしいという評価を受け、2008年に至っては原著の言語である日本語に逆翻訳されるという希有な例となった⁵⁾。さらにウェイリーの英訳は、ほかの多種の言語にも重訳されており、誤訳などの批判はあるものの『源氏物語』の翻訳を考える上で意義深いものであると言えよう。

韓国でも『源氏物語』は、1970年代に初めて翻訳されてから幾種の完訳や抄訳が出版され、日本文学を知る上で必読の書となっている。そこで本稿では、現時点における韓国語訳『源氏物語』の現状を把握し、先行研究を踏まえながら、韓国語訳『源氏物語』の現状と問題点を指摘し、古典文学の翻訳の在り方について考察する。それによって今後日本古典文学の韓国語訳を試みるにあたっての提言を示すこととしたい。

2) 伊藤鉄也氏の「『源氏物語』の翻訳状況」という調査報告によれば、2009年3月現在『源氏物語』の外国語訳は刊行されたもので24種類、現在進行中のものが4種類、未確認のもの6種類、計34種類となっている。そして1年経て、2010年6月29日版では「『源氏物語』の翻訳言語情報」とタイトルが改められ、さらにインドのアッサム語とマラヤラム語での2種の翻訳が確認されたことが報告された。その結果、刊行されたものは26種類となり、現在進行中のものと未確認のものを合わせると36の言語で翻訳されていることが確認された。そして2013年11月《さまざまな言語に翻訳された『源氏物語』》の展示会においては、31の言語で出版された翻訳本が確認できたとしている。(伊藤鉄也、「『源氏物語』の翻訳状況」、総研大ジャーナル15号(2009年春刊行)、国文学研究資料館と伊藤氏のブログ <http://genjiito.blog.eonet.jp/> 参照)

3) たとえば、韓国語による翻訳は「ハングル(韓国語)」として1種類に数えられているが、2013年現在出版された3種の完訳と3種の抄訳(子ども向け1種を含む)、そして現在進行中の韓訳(日本文学全集『源氏物語』に近い形で本文と注釈と訳を提示するもの)が1種、漫画1種が存する。英訳も、末松氏の英訳に始まりアーサー・ウェイリーとエドワード・サイデンステッカー、ロイヤル・タイラーの英訳に続き、抄訳としては1994年のマッカラによるものがある。中国語訳も台湾では林文月訳、中国においては銭稻孫・豊子愷・鄭民欽・姚継中・殷志俊・彭飛ほか12名による共訳など、未完や抄訳のものまで含めると総7種にのぼる翻訳が出版されている。したがって『源氏物語』の翻訳は各言語ごとに多種の翻訳本が存在することも念頭に入れておくべきであろう。

4) 平川祐弘(2008)『アーサー・ウェイリー『源氏物語』の翻訳者』白水社、pp.307-318

5) 佐復秀樹訳(2008)『源氏物語 ウェイリー版』平凡社ライブラリー

2. 韓国における『源氏物語』翻訳の現状

近年日本においても与謝野晶子・谷崎潤一郎などの現代語訳や外国語訳についての研究が進んでいるが、韓国語訳『源氏物語』についての研究は1990年代から始められた。先行研究と稿者の調査によれば2013年12月現在、韓国における『源氏物語』の翻訳は、先に述べたように計8種存する。その内これまで研究の対象となってきたのは、主に完訳である柳呈訳・田溶新訳・金蘭周訳の3種である。ただこれらは、ともに原文からの翻訳ではなく、完訳といえどもそれぞれ多少の問題を露呈している。

さて、これら3種の完訳本を対象とした先行研究は巻名の翻訳についての論考が最も多く、そのほか人名や官職名のような固有名詞や和歌・草子地・敬語・空間語の翻訳について、さらには誤訳の問題などについて行われてきた。その中で、『源氏物語』の韓国語訳の書誌について触れることになるが、論考によっては翻訳本の一部しか把握されなかったり、あるいは書誌に誤記があるなどの問題が見受けられる。そこで本稿では、各論考に見られる誤記などを改めるとともに、まだ把握されていない韓国語訳本も加えて、2013年現在の出版状況と書誌を「韓国語訳『源氏物語』一覧表」として下の表に整理しておきたい。韓国語版の題名や作者名・訳者名は分かち書きの有無を分けて表記した⁶⁾。

6) ① 表番号の1-1と1-4は、伊東好英氏の調査による。(伊東好英(2009))

② 柳呈訳の新装版 世界文学全集(乙酉文化社)上下二巻の『젠지(源氏)이야기』は、1979年11月10日刊である。伊藤氏以外の研究者の論稿では上下二巻本が1975年刊となっているが、1975年版は一卷本である。両本は訳文は一致するが表紙など装丁と解題の有無など本の構成が多少違うもので、1975年に一卷本が、1979年に上下二巻本が出版されたことをここに改めておく。

http://www.eulyoo.co.kr/book/writer.asp?writer_idx=1376 (検索日：2013.12.20)参照

③ 文明載訳は、表紙には「紫式部 著 文明載 訳」とし、奥書にはこれに加え「文紫式部 訳 文明載絵キム・ユンジュ、ユンジ(ママ)」としている。

④ 表に示した7種のほか、朴光華(パク・クァンファ)氏は「翻訳の基礎的な問題について —『源氏物語』韓訳の場合—」『海外における源氏物語の世界』において、『源氏物語韓訳一蜻蛉』(文華 第九号 日本文学研究会 2010.1.1.)があるとしている。これに国立中央図書館所蔵澤標巻(2008)を合わせ2巻のみ確認された。氏は凡例において、底本は全集本で、注釈は全集と体系や集成、評釈などを参考にしていることを明らかにしている。構成は本文と翻訳、そして注釈説明となっている。『源氏物語韓訳』は、市中に流通していないようなので表には加えず脚注で示した。

⑤ 韓国語で作者と訳者を表す「지음」と「옮김」の日本語訳は、単独で使われた場合は「著」「訳」と訳し、「~로 옮김」のように文章のような形で使われた場合は「著す」「訳す」と訳した。

韓国語訳『源氏物語』一覧表(2013年12月現在)⁷⁾

No.	翻訳者	出版年度	韓国語訳タイトル	韓国語訳タイトルの訳(和語による)	作者名・訳者名の表記	巻数	翻訳形態	出版社	全集名
1-1	柳星 (ユ・ ジョン)	1973	『겐지(源氏)이야기』	겐징(源氏) 이야기	紫式部 作 柳 星 譯	上下二卷	省略あり	文友社 (문우사)	世界古典文學大全 集上下二卷
1-2		1975				全1卷	完訳	乙酉文化社 (을지문화사)	世界文學全集 99 (全100)
1-3		1979				上下二卷	完訳	乙酉文化社 (을지문화사)	新装版 世界文學全 集
1-4		1982				上下二卷	省略あり	韓国出版社 (한국출판사)	『世界代表古典文學 大全集 (12)』7, 8
2	田添新 (チョン・ ヨシン)	1999	『겐지이야기』	덴징이야기	무라사키 시키부 지음 전승욱 옮김 (紫 式部 著 田添新 訳)	全三卷	完訳	나남출판 (나남출판)	無
3	林瓚朱 (임・ 찬주)	2005	『겐지모노가타리』	덴징모노가타리	임진수 무라사키 시키부 (林瓚朱 紫 式部)	全一巻	解説と抄訳	살림출판사 (살림출판사)	e시대의 절대사상 (e時代の絶対思想) 014
4	金蘭周 (김・ 난주)	2007	『겐지이야기』	덴징이야기	무라사키 시키부 지음◆세토우치 자루조 현대인문어로 옮김◆김난 주 한국어로 옮김◆김유천 감수 [表紙] 紫 式部 著 瀬戸内 寂聴 現代日本語に訳す 金蘭周 韓国語 に訳す 金裕千 監修 [背] 瀬戸内寂聴 著	全十卷	完訳	한길사 (한길사)	無
5	文明載 (문・ 명재)	2007	『겐지 이야기』	덴징 이야기	무라사키 시키부 지음 문명재 옮김 (紫 式部 著 文明載 訳)	全一巻	解説と抄訳	웅진씽크빅 (웅진씽크빅)	푸른담쟁이세계문 학 (『靑』 馮世界文學 3.8.22)
6	金鍾徳 (김・ 종덕)	2008	『겐지 이야기』	덴징 이야기	무라사키 시키부(紫式部)지음 김종덕 옮김 (紫式部 著 金鍾徳 訳)	全一巻	解説と抄訳	지만지 (지만지)	자만지고전출 판 (『ジマンジ』古典1000 行 100)35
7	李吉鎮 (이・ 길진)	2009	『겐지 이야기』 源氏物語 Asakiyumnishihi	덴징 이야기	YAMATO WAKI 訳者名は表紙や背の部分にはな く、奥付のみ記載	全十卷	完訳	AK 커뮤니 케이션즈 (AK 커뮤니 케이션즈)	無

7) 表作成及びハングルのカタカナ表記や括弧内の訳は稿者による。

2.2 韓国語訳『源氏物語』の書誌と底本(2013年12月現在)

現在のところ、韓国語訳『源氏物語』には原典からの翻訳はなく、韓国語訳者は各々重訳の底本について何らかの形で明らかにしているが、その提示の仕方については疑問を呈するを得ない箇所がある。以下、韓国語訳『源氏物語』の書誌をまとめた上の表をもとに、各訳書の構成や底本の問題などについて述べていきたい。

1) 柳呈訳『겐지(源氏)이야기』(ゲンジ(源氏)イヤギ)

韓国で初めて『源氏物語』を翻訳したのは1922年生まれの柳呈氏である。氏は、ユ・ジョン(유정)という名前で『源氏物語』を翻訳しているが、一方でユ・ユジョン(유유정)という名前でも翻訳を発表しており、その代表的な作品が村上春樹の『ノルウェーの森』の韓国語訳『상실의 시대(喪失の時代)』である。すでに故人となった柳氏だが、『ノルウェーの森』の翻訳本の内、最も優れた翻訳として今なお評価が高い⁸⁾。『源氏物語』の訳文も時代の変化に伴い多少古めかしい表現となったが、それでも流麗な訳文として十分評価できるものである。

この韓国初の柳呈訳本については、伊藤氏の論稿がもっとも詳しい。氏は、文友社(1973)と乙酉文化社(1975 / 1979)、そして韓国出版社(1882)から刊行された計4種の柳呈訳本の全集名と構成などの書誌を詳細にまとめ、解題などの問題点についても触れている⁹⁾。なお、伊藤氏は金鍾徳氏の韓国語訳は抄訳であるので論外とするとして金鍾徳氏の抄訳を言及しているが、同じく抄訳でありながら金鍾徳氏のものより先に出版された林賛洙訳『겐지모노가타리(源氏物語)』の方は触れていない。金鍾徳氏も『源氏物語』の韓国語訳についての論稿が幾種あるが、柳呈訳については乙酉文化社本を中心に記している。氏の最新論考においても「柳呈の『겐지 이야기(源氏物語)』初版は、1975年乙酉文化社の『世界文学全集』全100冊中99番目の一冊として出版された」とした上で、1982年刊の韓国出版社本にも触れ、これを乙酉文化社の翻訳をさらに抄訳したものとしている。しかし、この部分については伊藤氏が1973年の文友社本と一致していることを明らかにしている¹⁰⁾。

8) 『ノルウェーの森』の初めての翻訳は柳氏の『상실의 시대(喪失の時代)』(文学思想社)で、以降の4種の翻訳は題名をそのまま訳し『노르웨이의 숲(ノルウェーの森)』として出版された。

9) 伊藤好英(2009)『柳呈による韓国語訳『源氏物語』の「本文」「解説」「注釈について」藝能

10) 金鍾徳氏は「한국에서의 『겐지 이야기(源氏物語)』 번역과 연구(韓国における『源氏物語』翻訳と研究)」(2009)において「류정은 1982년 한국출판사의 세계대표고전문학전집 12권 중 7, 8권으로도 『겐지 이야기

さて、訳者の柳呈氏は、1979年版解題の「韓国語訳における方法論」において『源氏物語』異本のことについて説明し、『日本古典文学大系』を底本としたと述べている。さらに与謝野晶子と谷崎潤一郎にも触れ、「この両者の現代語訳本はともに原書の語句と文体を忠実に訳しただけでなく、高い文学性を生かすよう尽力した点で高く評価されている。特に与謝野のそれは彼女自身優れた歌人であることから、数多くの和歌の点綴するこの小説を平易で流麗な現代語文体に訳することに成功したと評判が高い(稿者による逐語訳)」とし、与謝野訳を評価している¹¹⁾。その上で両者の現代語訳を韓国語訳にあたって参考にしたと述べているが、実際のところは、「参考」したのではなく与謝野晶子訳を底本テキストとした訳であることが先行研究によって明らかになった¹²⁾。さらに、乙酉文化社の新装版に付された解題などの記述の中心的部分も池田弥三郎氏による源氏物語の解説をほぼそのまま翻訳したものであることも指摘されている¹³⁾。このように柳呈訳は、完訳した訳者三人のうち『源氏物語』に定本が存しないことによる異本の存在や校訂について解説するなど、異本や低本に対する意識があったことが見受けられるにもかかわらず、低本についての誤情報を示しているのである。

2) 田溶新訳『겐지이야기』(ゲンジヤギ)

柳呈訳の次に翻訳されたのが、1999年刊の田溶新訳『겐지이야기』である。1921年生まれ田氏は、心理学者として定年して後『日本書紀』と『源氏物語』の翻訳に取り組んだ異色の訳者である。2012年故人となり、『겐지이야기』が遺作となった。

田氏は、『겐지이야기』の解説において紫式部と平安文学と注釈についての簡単な説明を加えた上で、先行訳である柳呈訳について「底本が明示されてなく敷衍した所が原本とは相

기』 상하를 출판했는데, 이는 을유문화사의 번역을 더욱 초역한 것이다.(柳呈は、1982年韓国出版社の世界代表古典文学全集12巻のうち、7、8巻としても『源氏物語』上下を出版したが、これは乙酉文化社の翻訳をさらに抄訳したものである)」としている。

11) 柳呈(1979)『겐지(源氏)이야기』乙酉文化社, pp.26-27

12) 金鍾徳氏は、「柳呈訳の源氏物語は全体として与謝野晶子訳に近いというのが読んだ後の感想である」(p.229)「柳呈氏は韓国語訳の解題で与謝野訳を参考にしては言うものの、五十四帖に渡って与謝野晶子訳と思われるところが散見される」(p.262)として、柳訳の底本の問題点を指摘した。(金鍾徳(1992)「韓国における『源氏物語』研究」『源氏物語講座9』、勉誠社)その二年後に日向氏は、「朝鮮語訳『源氏物語』について」、「物語 その転生と再生(新物語研究)2」において桐壺巻の検証により大系本ではなく、ほぼ与謝野晶子訳に拠ったことを明らかにした。ここで言う「与謝野晶子訳」は、与謝野三度目の現代語訳である『新新訳源氏物語』のことであり、桐壺巻だけでなくほかの巻を検討してみても改行まではほぼ同じであった。

13) 伊藤好英(2009)『柳呈による韓国語訳『源氏物語』の「本文」「解説」「注釈について」藝能

当違っており、省略した部分が多かった。原文と1対1の翻訳としては不適當であると思った」とし、そこで、日本古典文學全集の『源氏物語』を底本として、下段の現代語訳から訳し、注釈は必要に応じて脚注に入れ、簡単なところは訳文の括弧内に入れたとしている¹⁴⁾。しかし、田氏は柳氏を批判しながら、自らも誤訳或いは脱訳が認められるのも事実で、これまでの研究でおしなべて批判の声が高かった。しかし、程度の差こそあれ、ほかの韓国語訳にも省略や誤訳など色々な問題が散在している。概ね田氏の訳が意味の取り違いも多く見られ、精度の低い訳が見られるという問題はあるにせよ、良訳の部分もあり一辺倒に批判すべきではないだろう。特に底本とした日本古典文学全集『源氏物語』の体裁にならった構成—あらすじと注釈、番号付き章題など—も、日本の古典文学になじみのない読者にとってはわかりやすく親切なものである。

3) 林瓚朱訳『겐지모노가타리』(겐지モノガタリ)

2005年に出版された『겐지모노가타리』は『源氏物語』の入門書という体裁で、3部構成になっている。1部は「時代・作家・思想」として、千年のベストセラー、時代背景と作家、主要登場人物並びにあらすじ、主要テーマ、意義と影響の5つの章立てになっており、2部は本文の抄訳、3部は関連書として『紫式部日記』の内容を簡単に紹介している¹⁵⁾。全巻の訳がないのは残念だが¹⁶⁾、時代背景とともに作品の一部を鑑賞できるという面で、異文化としての『源氏物語』理解に役立つ書と言えよう¹⁷⁾。但し、作者名を「임찬수 무라사키 시키부(林瓚朱 紫式部)」とし、両者による共同執筆のような体裁を取っているのは正確性を欠くものである。さらに、38巻の翻訳に当たっては円地文子訳の『源氏物語』を中心に用いたと明らかに

14) 田溶新(1999)『겐지이야기』나남출판, pp.8-9

15) 3部構成ではあるが、1、2部はほぼ半々位の分量、3部は264頁中9頁と分量が少ない。

16) ただ抄訳されているのは54帖のうち38の巻のみである。特に1部後半の脱略が目立つが、その理由についての言及は見られない。抄訳した巻名は、「1권 기리쓰보[桐壺]」(1巻 キリツボ[桐壺])のように日本語の読みをそのままハングル表記しているが、「須磨」のみ「수마」となっている。日本語の「う段」のハングル表記を通常の「으」ではなく、「우」と表記することもあるが、ほかの巻名の表記を見る限り、「桐壺」「つ」や「空蟬」の「つ」、「薄雲」の「す」などは「쓰(つ)」「스(す)」と表記しているので、「수마(須磨)」の「수」だけ漢字音で読んだか、或いは誤記とみられるが、いずれにせよ統一性を欠くものである。以下抄訳されている巻名を挙げておく。「桐壺」「帚木」「空蟬」「夕顔」「若紫」「末摘花」「紅葉賀」「花宴」「葵」「賢木」「花散里」「須磨」「明石」「薄標」「薄雲」「若菜(上)」「若菜(下)」「柏木」「夕霧」「御法」「幻」「匂兵部卿」「橋姫」「総角」「宿木」「浮舟」「手習」「夢浮橋」

17) 中央大学(韓国)教授の林氏は、自著について「この本は『源氏物語』を容易に理解できるよう作者の生涯と作品の主要思想、あらすじ、名文を抜粋し翻訳した入門書(稿者による逐語訳)」(前書き:p.9)であると性格づけている。

しているが¹⁸⁾、実際は円地訳の忠実な翻訳とは言えない。円地訳に沿って訳しているところもあるれば文章を省略したり短くまとめたりと梗概書のような本文となっているところもある。なお、金鍾徳氏の抄訳より三年ほど先に出版された林氏の抄訳については、これまで田中幹子氏のみ言及しており¹⁹⁾、ほかの論稿ではまったく触れられていない。

4) 金蘭周訳『겐지 이야기』(ゲンジヤギ)

2005年の抄訳『겐지모노가타리』を経て、2007年には瀬戸内寂聴の現代語訳を翻訳した『겐지 이야기』全10巻が出版された。訳者の金蘭周氏は韓国でよく知られている日本現代文学翻訳家で、江国香織をはじめ数多くの現代文学を翻訳しており、『源氏物語』の翻訳も瀬戸内の現代語訳を底本としている。祥明大学教授の金裕千氏が監修に当たった。金蘭周訳は、瀬戸内源氏の忠実な訳であり、体裁も講談社刊『源氏物語』にならい、訳のほかには装画や瀬戸内の巻末文、参考図録、官位相当表、系図、年立なども翻訳している。しかし、全体的には瀬戸内訳の構成に従いながらも、付録の部分や著者の表記などにおいては多少の問題があることを指摘せざるを得ない。たとえば、金蘭周訳の底本テキストである瀬戸内訳では巻末に参考図録や語句解釈が加えられ、各々の作成者名を詳細に明示してある²⁰⁾が、金蘭周訳では、それらがそのまま翻訳されながらもその作成者についてのことわりはなく、それが瀬戸内訳によるものか、訳者によるものか明確でない。参考図録がそのまま翻訳されているならその作成者も明示すべきであろう。ここで省略可能なところは、瀬戸内訳の校閲者のみであろう。その中で、唯一「語句解釈」については、凡例において高木和子氏によることを明らかにしているが、それが瀬戸内訳の巻末に添えられたものであることには触れていない。そして高木氏の「語句解釈」から抜粋し項目を分ける形で「어구해설(語句解説)」と「인용된 옛노래(引用された古歌)」を巻末に付している。ただ、高木氏のそれがそのまま翻訳されているわけではない「어구해설(語句解説)」にのみ、「作成者：高木和子」と明記されている²¹⁾。さらに作者や訳者名の表記においても、金蘭周訳『겐지 이야기』の表紙に

18) 林瓊朱(2005)『겐지모노가타리』살림출판사, p.121

19) 田中幹子(2010)「韓国語訳『源氏物語』における解釈上の諸問題について—『桐壺』巻(1)」『比較文化論叢』25

20) 瀬戸内訳では参考図録の担当として、校閲は世辻秀紀、官位相当表と源氏物語(巻毎)系図は八嶋正治作成、源氏物語年立(巻毎)は高木和子作成と明示、そのほか校閲に八嶋正治 小山清文装画 石踊達 哉、語句解釈 高木和子作成と明示してある。しかし、欄訳では「語句解説」の作成者のみ示されている。

21) 但し、凡例に高木和子作成の語句解釈から訳者が抜粋したとあるが、実際は翻訳と言うよりは訳者がかなりの取捨選択をした上で、解説をまとめたものである。これには、高木氏作成の「語句解説」にない項目もあり、「仮名」「賀茂」「源氏」など、金蘭周氏自ら付け加えている項目も少なくない。解説

は「紫式部著す 瀬戸内寂聴現代語に訳す」となっているが、本の背には「瀬戸内寂聴 著」となっており、原典と底本テキストについて混乱を来す結果となっている。

5) 文明載訳『겐지 이야기』(ゲンジイヤギ)

『源氏物語』の完訳3種が出たところで、もう一つの抄訳が出版された。2007年ウンジンシンクビック社の子供向け世界文学全集である『靑い蔦世界文学(푸른담쟁이세계문학)』²²⁾の22巻『겐지 이야기』(ゲンジ イヤギ、源氏物語)である。訳者の文明載氏は、韓国外語大学教授で、表紙と奥書には「紫式部 著 文明載 訳(무라사키 시키부 지음 문명재 옮김)」としている。氏は「訳者のことば」において、原作に忠実でありながらも「子どもの読書として適さない内容や一部辻褃の合わない部分は省略したり書き直した」とことと、量が多いため「原作の味と粋を損なわない範囲内で縮約」したことを明らかにしている²³⁾。全19章構成で、宇治十帖は最後の19章「薫の愛と別れ」のみとなっており、各章ごとに章題に合った内容が挿絵とともに紹介されている²⁴⁾。「女御」「更衣」のような語句には脚注をつけ、巻末には「作家紹介」「作品紹介」「作品深読み1」「作品深読み2」において『源氏物語』の理解を深め、さらに「物語情報」「さらに読んでみよう」を置き、平安時代の時代背景や女房文学、出家などについての説明とともに『竹取物語』『枕草子』『今昔物語集』についての簡単な説明も為され、『源氏物語』の時代挨拶や平安文学を知る上で非常に分かりやすく読みやすい書として評価に値するものとなっている。全体的に『源氏物語』を「愛の物語」「因果応報」「人生無常」の観点から読むことに主眼が置かれている。底本テキストについての言及はなく、こちらも梗概書

も高木氏の解説をそのまま訳したものではないので、厳密に言えば「어구해설(語句解説)」の最後に「作成者：高木和子」としているのは正確性を欠く。そして蘭訳では「語句解釈」から抜粋して「인용된 옛 노래(引用された古歌)」として別項目で挙げて引歌を提示しているが、『源氏物語』において和歌がいかに重要な位置を占めるものか、引歌とは何かについての言及がまったくない。和歌や引歌に対する理解がなければ、読者は「인용된 옛 노래」を理解することは困難であろう。さらにこれらの語句解釈や引歌は索引もなく、ハングルの順番に並べてあるだけなので原文のどこの語句なのか非常に分かりづらくなっている。

- 22) ウンジンシンクビック社はこの全集の対象を小1~小6としている。

(http://www.wjthinkbig.com/marketing/products/product_detail.aspx?seq=000000000001004724検索日 2013.12.20)

- 23) 文明載(2007)『겐지 이야기-訳者のことば(옮긴이의 말)-』웅진씽크빅, p.1

- 24) 文明載訳『겐지 이야기』は、次のように19の章題をつけている。「01藤壺女御と光源氏 02空蟬と夕顔 03天真な紫の上と藤壺女御の出産 04六条御息所の生霊と葵の上の死 06須磨での流配生活 07明石で結ばれた愛 08源氏の復帰 09六条御息所の死と末摘花 10明石の君と娘との再会 11藤壺太后の死 12玉鬘の結婚と宮仕え 13夕霧の愛と結婚 14女三宮と源氏の縁 15明石女御の出産 16柏木と女三宮の密通 17女三宮の出産 18紫の上の死と源氏の出家 19薫の愛と別れ」

のような性格のものになっている。小学生を対象とした全集として出版されたものではあるが、成人向けの入門書としても十分読み得るものになっている。

6) 金鍾徳訳『겐지 이야기』(ゲンジイヤギ)

そして3番目の抄訳となる金鍾徳著の『겐지 이야기』が出版された。奥書には、2008年2月15日に初版1刷として300部限定、2009年2月25日に初版2刷が出版されたとなっている。金鍾徳氏は韓国外語大学教授で、韓国語訳『源氏物語』についての論考も多数発表しておられる。氏の『겐지 이야기』は、これまでの訳が「すべて日本語の現代語訳を翻訳したもの」であるのに対して、「できる限り原文を中心として翻訳したという点」²⁵⁾で以前の翻訳と差別化を図ったとし、「解説」と「作者について」、そして一部分の「本文」の韓国語訳と「解説」で構成されている。巻毎に2~3行の簡単なあらすじと「背景と場所」において物語の舞台となる場所を、「登場人物」において主要登場人物の年齢を明記してから小題目を挙げて各巻の冒頭部分や文中の一部分を2頁弱抄訳し、「解説」においてあらすじを簡単にまとめている。本文翻訳においては、日本古典文学全集『源氏物語』の本文を底本としているので、以前の2種の抄訳に比べて全集の原文を生かした訳となっている。抄訳であるため研究対象としては論外とすることが多いが、巻名の訳についての比較研究がある²⁶⁾。

7) 李吉鎮訳『겐지 이야기』(ゲンジイヤギ)

完訳3種、抄訳3種を経て、2009年には日本においても『源氏物語』関連書では圧倒的な販売部数と影響力を持つ漫画『あさきゆめみし』の翻訳本10巻が出版された。表紙には、黒字で「The Tale of Genji」とあり、その間にピンク色で「겐지 이야기」と「源氏物語」、その下には「Asakiyumemisihi」と原題がある。作者は「YAMATO WAKI」と示し、訳者名は記していない。この表紙は、2008年版『あさきゆめみし』の表紙と同じ絵・文字色・配置となっている。巻末には登場人物の紹介と大和和紀によるあとがきが翻訳されている。訳者の李吉鎮氏は1934年生まれで1958年ソウル大学社会学科を卒業、川端康成『雪国』、大江健三郎『飼育』、司馬

25) 但し、この場合も原典の本文からの翻訳ではなく、あくまで全集の校訂者による校訂本文からの翻訳であるので、厳密に言えば重訳の範疇に入るものであろう。金鍾徳(2008 : p.3)「編集者ことわり (편집자 일러두기)」

26) 田中幹子(2011)「韓国語訳『源氏物語』の巻名について」『札幌大学総合研究』第2号

遼太郎『竜馬が行く』などの翻訳と著書『徳川家康の一生とリーダーシップ』がある。この漫画本の翻訳の最大の問題点は、両言語の表記の違いから生じる問題である。すなわち、日本は縦書きなので左から右に読み進むが、韓国語は横書きをするので原文の順序と逆になり、意味伝達の順序が逆になることがあり、読みにくい面がある。

以上、2013年現在の韓国語訳『源氏物語』の書誌と底本テキストについて整理してきたが、先行研究によって把握された翻訳本の内、共通して把握されているのは、田溶新訳・金蘭周訳・金鍾徳抄訳で、柳呈訳と林瓚洙訳についての把握は研究者によって様相を異にする。柳呈訳の場合は、金鍾徳氏が3種、伊藤好英氏が4種挙げており、李智善氏は1975年の1種のみ、田中幹子氏は注において上下二巻の1種を挙げているが絶版という理由で論外としている。田溶新訳は、1999年以降の論稿にはすべて挙げられている一方、林瓚洙抄訳については田中氏のみ触れている。その他に挙げた李吉鎮訳『あさきゆめみし』と文明載氏による子供向けの抄訳については本稿が初出となる。

3. 韓国語訳『源氏物語』の翻訳上の諸問題

現代日本人にとっても原文では読みづらいとされる『源氏物語』を、外国語に現代語訳するという翻訳行為は、実に様々な問題点を露呈することになる。そこには言語の違いという翻訳行為における一般的な問題にとどまらず、『源氏物語』という作品の特質による問題まで加わることになる。「一つの問題を解決したら、また一つの問題が壁のように目の前に立ちはだかった」²⁷⁾と吐露する金蘭周氏のように、訳者は翻訳を進めて行く上で様々な問題にぶつかることになる。

そこで本章では、外国の文学であり、しかも定本の存しない古典文学である『源氏物語』を韓国語訳する際の問題点を「日―韓の言語差による問題」と「翻訳と底本テキストの問題」という観点から考察していきたい。特に後者においては、古典文学の翻訳における底本の重要性という根本的な問題と関連付けて韓国語訳の底本を考える。さらに翻訳における底本の問題は、原作原著に対する訳者の姿勢とも関わる問題であるので、本稿の考察は、今後新たに『源氏物語』が韓国で翻訳される際に準拠し得る提言にもなろう。

27) 金蘭周(2007)『겐지이야기』10巻, 한길사, p.371

3.1 韓国語と日本語間の翻訳における諸問題

末松・ウェイリーに次ぎ『源氏物語』を英訳したサイデンステッカーは、『源氏物語』の翻訳の際に「登場人物に名前を与えるべきかどうか、原文と翻訳語の時制の違い、形容詞や動詞の語形の処理のどの問題に直面する」²⁸⁾と述べている。

当然のごとく、このような問題は英訳だけのものではない。翻訳とは一つの言語で表現されたテキストを別の言語テキストに置き換える行為であり、常に対象国の言語的特徴と文化の影響を受けることになるので、翻訳者は、起点言語と目標言語の特性や原典の性格等によって様々な問題に直面することになる。それこそ、翻訳者は翻訳に当たって言語学者の見地と文学批評家の見地、そして作家の見地に立って翻訳を進めなくてはならない²⁹⁾。そのような見地で韓国語と日本語という異言語間の翻訳における問題を考えると、概ね次のような点を挙げることができよう。

1) 文法の違いをどう訳すか

韓国語や日本語の文法の違いの中で翻訳の際に特に注意すべきところは、まず助詞の「の」の翻訳である。日本語の「の」は、連体修飾語、主格、準体言などの用法があり、それだけ日本語の文章において多用される助詞である。しかし、「の」の直訳である韓国語の「의」は、連体修飾語として使われ、日本語のような主格や準体言の用法はなく、省略されることも多い。したがって場合によっては「の」を逐一「의」と訳さず、適宜省略したり「~의 것」のように言葉を補う必要がある。また、日本語は受身表現を好む傾向があるが、韓国語は能動態の方を好み受身表現を日本語ほど使わない特徴もある。さらに「~しませんか」や「~しなければならない」のように否定形を用いる表現が多い日本語に対して、韓国語や否定形を日本語ほど用いない。敬語も日本語は尊敬語・丁寧語・謙譲語とあるが、韓国語では謙譲語がほとんどないに等しい。したがって訳者は、このような助詞や受身表現、肯定と否定形、敬語などの文法の違い³⁰⁾を起点言語と目標言語の言語構造や表現様式の特徴に鑑み、等価性の有する韓国語を訳語として選ばなければならないのである。

28) Edward G. Seidensticker (2004) “Translation: Old Problems Revisited” 伊井春樹編『国際化の中の日本文学研究 国際日本文学研究報告集 1』風間書房

29) 최현무(1995)『문학작품 번역의 몇 가지 문제점』오늘의 문예비평, pp.135-145

30) 勿論韓国語と日本語の文法の違いはこれに限らないが、ここでは両言語の違いが顕著に現れる項目を簡略に挙げることによって、翻訳の際に問題となる例として提示した。

2) 固有名詞をどう訳すか。

固有名詞の訳し方とは、人物の呼称や地名、官職名、宮廷用語などをどう表記するかという問題である。そのまま漢字読みにするか、日本語の発音どおりに表記するか、或いはほかの表現を用いるかなど、訳者の判断が読者の作品理解に大きな影響を及ぼすことになる。

その典型的な例として、『源氏物語』のタイトルの訳が挙げられよう。韓国語訳において、「源氏」は全種そのまま日本語読みをして「젠지(ゲンジ)」としているが、「物語」の方は多様に訳されている。まず、田溶新訳と金蘭周訳は同じく「源氏」は日本語読みを、「物語」は「이야기(イヤギ)」と訳し、『젠지 이야기』としている。そして、分かち書きの違いのある『젠지 이야기』(文明載訳)(金鍾徳訳)と漢字を併記した『젠지(源氏) 이야기』(柳呈訳)、そして日本語読みをそのまま表記した『젠지 모노가타리(ゲンジモノガタリ)』(林瓊洙訳)もあり、漫画の『あさきゆめみし』の韓国語訳は、『젠지 이야기』と分かち書きのタイトルとなっている。

翻訳本は以上の通りだが、研究論文や図書館での書誌では『源氏物語』を韓国語の漢字音で読んだ『원씨물어(ウォンシムロ、源氏物語)』となっている場合も少なくなく、韓国において『源氏物語』の韓国語訳はまだ定着していない。これは、『源氏物語』全体を固有名詞と捉えるか、あるいは「源氏の物語」のように「源氏」は固有名詞として、「物語」は普通名詞と捉えるかなど訳者の判断によって変わってくるものである。さらには、訳者が「源氏物語」をどう捉えたかによって、分かち書きをするかしないかが決定されるのである。一方、意味よりも表記の問題と捉えるならば漢字音で読み『원씨물어』となり、日本語の読みをそのまま表記すると『젠지 모노가타리』となる。このような事情は人物の呼称や巻名の訳においても同じで、これについては先行研究においても指摘されているところである³¹⁾。

3) 言語的等価性を有しないものをどう訳すか。

異言語間には起点言語と目標言語の言語形態や文化の違いによって言語等価性を有しない表現が存在する。それは文化の違いによるものであったり、作品の特徴によるものであったりするが、訳者としては殊に苦心するところである。

31) 代表的な論考に金鍾徳(1992)、李芝善 (2007)、田中幹子(2011)などがある。

『源氏物語』の場合、まず文化の違いによるものとしては、「あはれ」や「をかし」のような日本特有の美意識や「女房」のような身分制度にもとづく用語、「廂」や「端」のような建築空間用語³²⁾などを例に挙げられるだろう。たとえば、平安文学を理解するに当たって重要な「女房」と呼ばれた女性たちの訳語も等価性を有する韓国語は存在しない。韓国で宮中に仕えた女性は「궁녀(宮女:クンニョ)・궁인(宮人:クンイン)」、「나인(ナイン)」と呼ばれ、宮中への出仕と退出が流動的であった平安時代の女房とは違って、あくまで御上に従属的立場で一度出仕すると宮中を出ることが許されず、一生ほかの男性と通じることは断じて許されない立場の女性たちであった。また、貴族階層に側仕える女性は「시녀(侍女:シニョ)」と呼ばれた。「시녀(侍女:シニョ)」は「나인」のことを指すこともある。したがって、これらの用語は「女房」の持つ意味の一部分を示すにすぎない³³⁾。さらに寝殿造の「廂」という空間用語も韓国に等価性を有する表現がない。このように言語的等価性を有する表現がない場合は、訳語の選択が非常に難しく、誤訳も招きやすいので訳者の作品理解や背景知識に基づいた言語能力が問われることになる。

4) 文化的等価性を有しないものをどう訳すか。

さらに言語表現だけでなく、『源氏物語』の草子地のような作品特有の文体や韻律のある定型詩なども翻訳の際に等価性を有しないものである。この場合も翻訳に臨む訳者の判断如何によって、読者に伝わる作品の内容や雰囲気は大きな違いを見せることになる。たとえば、「三十一文字」の和歌をどう訳すかという問題は『源氏物語』を訳す際にたいへん重要な要素となるが、和歌を五・七・五・七・七の韻律で韓国語訳することはほぼ不可能である。和歌の翻訳に少なからず頭を悩ませたと吐露する柳氏は、『源氏物語』を歌物語の性格もあると把握した上で、和歌の翻訳の際に音律は無視して訳したとし、韓国語に翻訳不可能のものや、さして重要でないと判断される和歌は地の文として訳したことを明らかにしている³⁴⁾。一方、田氏と金欄周氏は和歌の訳し方については言及しておらず、各底本テキストの訳に従って訳している。

さらには文体の問題である。『源氏物語』の場合、草子地などをどのように訳すかによ

32) 金秀美(2013)「『겐지모노가타리(源氏物語)』공간표현의 한국어역 고찰-히사시(廂)·하시(端)를 중심으로-」『일본연구』제57호

33) 拙著(2004), pp.13-108

34) 柳呈(1979), pp.27-28

でも、作品の趣きは随分変わることになる。北村結花氏の指摘のように『源氏物語』の現代語訳においても、与謝野晶子の新新訳は草子地を省略したり語り手の存在を意識させない訳になっている反面、谷崎潤一郎は草子地を忠実に訳しており³⁵⁾、それが両者の現代語訳の大きな特徴となっているのは言うまでもない。さらに『源氏物語』文体における語り手の存在は、文末辞にも影響をおよぼすことにもなるのである。

5) 述語形式をどうするか。

述語の形式とは、文末形式をどうするかという問題である。日本語のように多様な文末辞を用いる言語を韓国語に訳す場合は、当然どのような文末辞を用いるかによって作品の雰囲気はかなり違ってくるものである。したがって古語であれ、現代語であれ、訳者は日本語を韓国語に翻訳するにあたって、自分の読みと判断で文末辞をどうするかを決めなければならない。

文末形式を常体にするか、敬体にするかという問題は、韓国語にも日本語の「ダ・デアル体」や「デス・マス体」などと同じ機能をする述語の形式があるので、常体と敬体を対応させ訳すことは可能である。しかし、日本語を韓国語訳する場合、必ずしも文末形式を対応させた訳がいいとは限らない。なぜなら一般的に韓国語の文語は、「デス・マス体」などの敬体を日本語ほど使用しないからである。実際、自己啓発本を例にみても、日本語の場合は「デス・マス体」も多い反面、韓国における「~로니다(~です)」体はほとんど使われず、「ダ・デアル体」である「~다」体が主流である。したがって、日本語の自己啓発本を韓国語訳する場合は、述語の形式を「~다」、つまり敬体を常体文末に変えた方が適していることが多い。

日本においても古語のテキストを現代語訳する際には訳者によって文末表現が異なっている。『源氏物語』の現代語訳も、初の現代語訳とされる与謝野晶子訳をはじめ円地文子、最新の林望訳などは常体、谷崎潤一郎訳や瀬戸内寂聴訳などは敬体を用いて訳している。一方韓国語訳の場合は、柳呈・田溶新・林瓚洙・金鍾徳の四氏は文末を常体に、瀬戸内訳を韓国語訳した金蘭周氏は、同じく敬体を用いて翻訳している。柳呈訳は与謝野晶子の新新訳、田溶新訳と金鍾徳訳は全集、林瓚洙は円地文子訳を主要底本としていることから、文末形式もそれぞれ重訳の底本テキストに従っているものとみられ、重訳での底本テキストが翻訳される文末形式にも影響を及ぼしていることがわかる。

35) 北村結花(1992)『『源氏物語』の再生—現代語訳論』『文学』3巻1号

6) 句点と読点、改行をどうするか。

日本語は殊に句点が多用される言語であるだけに翻訳において句点と読点、改行をどうするかという問題も訳者の判断のもとに決定される。これは、日本語によって『源氏物語』の原典を漢字を当て活字化する際や現代語訳する際にも生じる問題でもある。校訂者や現代語訳者によって句点の位置や数は異なる。読点、改行も然りである。逆に韓国語の場合の一つの文章に句点をまったく使わないことも多く、文中に句点がいくつもあることは特別な場合のみである。したがって日本語を韓国語に訳す際には、なるべく句点をなくし、逆に韓国語を日本語に訳す際には句点を適宜入れないといけない。さらにどこで改行するかという問題も訳者が決定しなければならないことである。改行は底本テキストに従うことも多いが、一つの文章を訳す際には、そのまま一つの文章に訳すこともあるが、場合によっては訳出の言語に合わせて途中で文章を切ることもあれば、文章をつなぎ合わせて一つの文章にすることもある。これらも訳者の判断によって決定されるものである。

さて、『源氏物語』のような古典文学を翻訳をする場合は、底本テキストを訳した訳者みずからの判断で文を区切り句点を付け、読点で文末を示し、文章を段落付け改行する。だからこそ現代日本語訳においても訳者によって殊に句点の多い訳もあれば、少ない訳もある。そしてそれを重訳する場合は、一度訳者によって句点と読点、改行が施されたものから目標言語として自然な形の句点と読点を付し、改行を行っていくのである。換言すれば、重訳の場合は現代語訳者による句点・読点・改行の影響を受け、その上で重訳の訳者の判断によって目的言語への移植が行われるのである。したがって、底本が何であるかで句点・読点・改行の様相が変わってくるのは必至である。

以上、日本語を起点言語とし、韓国語を目標言語として翻訳を行う際に言語や文化の違いによって生じ得る問題について概略的に考察した。これに加えて翻訳行為における解釈の問題もたいへん重要である。語義をどう解釈するか、作品をどう解釈するか、作者によって造形された人物像をどう捉えるかなどの解釈の領域も訳者がどのように解釈したかによって翻訳された結果は違ってくるのである。一つの作品が幾種の翻訳を生み出す所以である。なお、ここに挙げた諸問題は、各項目や各表現を一つのテーマとしてより詳細に研究されなければならないものであるので、ここでは底本テキストが翻訳に及ぼす影響を考えるにとどめ、今後稿を改めて論じたい。

3.2 翻訳と底本テキストの諸問題

翻訳とは、起点言語の原典テキストがあつてはじめて成り立つものである。そしてその底本となる原典テキストは、原著者によるテキストと、それを誰かが翻訳したテキストの二つに大別できる。上の3.2で挙げた韓国語訳における諸問題において、前者の原典からの翻訳や現代の著作物を訳す場合は、これらすべての項目について訳者自ら適切な判断をし決定を下すことになる。しかし、誰かが翻訳したテキストを重訳する場合は、底本自体が上の過程を経たテキストの翻訳となるわけで、重訳をする訳者は判断の多くを底本の訳者に委ねることになるのである。特に作品の解釈や、4) 5) 6)などの項目は、底本テキストにおける訳者の判断と決定の道筋をそのまま辿り、底本テキストの訳者の解釈に依拠することになるのである。したがって一度原典からの翻訳過程を経たテキストを底本として重訳する場合は、原典テキストの作家とともに底本テキストの訳者の存在が作品に大きな影響を与えることになる。このことは『源氏物語』のような定本の存しない古典文学の翻訳を考えるに当たって大変重要なことである。

そこで何故原典からの翻訳と重訳の際に底本の問題が重要であるかを具体的な例を挙げながら考察していきたい。谷崎潤一郎による『源氏物語』の現代日本語訳を例にして考えてみると、谷崎の現代語訳は江戸時代に成立した『湖月抄』を底本テキストとして、山田孝雄という研究者の助力により作品への理解を深め、訳文とともに頭注をつける形で翻訳されたものである。したがって谷崎の現代語訳は、谷崎によって読まれ、谷崎が解釈した、谷崎の源氏物語なのである。その過程において述語形式を敬体とすることで語り手の存在を生かし、『源氏物語』の文章を現代に再現しようとしたのは、ほかでもない現代語訳者の谷崎である。だからこそ、近代文学的な筆致で翻訳された与謝野と平安時代の雰囲気醸し出そうとした谷崎の翻訳は、相異なる両作家による源氏読みとその個性が現代語訳に込められているのである。もう一つ例を挙げれば、原典テキストより分量がかなり増えている瀬戸内寂聴の現代語訳である。文字数が多くなったのは、述語形式が敬体であることと、現代の読者にわかりやすいように主語が補われ、訳文においても加筆された部分が多いからである。日本語という言語的特性として、主語を省略することが多いにもかかわらず、瀬戸内訳には原文では省略された主語が補われている。このように加筆された部分は、詳しい説明によって現代の読者にとって分かりやすいという面はあるが、それはあくまで瀬戸内の源氏読みによって瀬戸内が決定した翻訳方法なのである。したがって、瀬戸内の現代語訳を底本テキストにして翻訳をするならば、必然的に原典にはない主語や加筆

された部分も訳すことになるので、原典と底本の関係を明確に抜かりなく提示する必要があるのである。

さらに『源氏物語』は作家の自筆本がなく、異本の存するテキストであることから、訳者は諸本の内どの本文を底本として訳すかを決定することから始めなければならない。

『源氏物語』の本文系統を河内本・青表紙本・別本の三系統に分けるが、これら異本はそれぞれ異なる本文を有しているので、訳者がどの本文を底本にするかという問題は翻訳行為の根幹をなすものであり、看過してはならない問題である。さらに本文の系統を決め、注釈を参考にして現代訳語に訳すのであれば、旧注を参考にするか、あるいは新注を参考にするか、旧注と新注の両方を参考にするか、現代に出版された研究者による注釈を参考にするかというように、どの注釈を参考にして訳すかによっても、訳文の性格が変わることになる。

和歌の異文を例に挙げてみると、『源氏物語』諸本すべての異文を調査した結果、異文のある和歌は五百首ほどにのぼり、その中には誤写による異文もあるが、解釈上有意な異文も多数みられる³⁶⁾。青表紙本と河内本の有意の異文を例として、葵巻で源氏が若紫と新枕を交わした翌朝詠んだ「あやなくもへたてけるかなよをかさねさすかになれしよるの衣を」を挙げることができよう。最後の「夜の衣を」は青表紙本系統の本文で、河内本系統では「中の衣を」となっている。近年の現代語訳や活字本『源氏物語』は青表紙本を善本としていることから、「夜の衣を」となっている本文が多いが、江戸時代の『湖月抄』には「中の衣」となっている³⁷⁾。そして、その『湖月抄』を底本テキストとした与謝野と谷崎の現代語訳も「中の衣を」としている。「夜の衣を」と「中の衣を」の違いは、「夜の衣」とは寝る時に着る衣という意味が強く、「中の衣」といえば、「中」と「仲」をかけ「間柄」という意味が重なることになる³⁸⁾。

もう一つ花散里巻の地の文の例を挙げると、青表紙本系統では「よく鳴る琴を、あづまに調べ、かきあはせ、にぎははしく弾きなすなり。」とある部分が、河内本では「箏の琴に、あづまを調べあはせて、よしよしいう弾き鳴らすなり。」³⁹⁾とある。源氏が花散里の家から聞こえてくる音楽に立ち止まる場面の地の文だが、聞こえてきた音楽が和琴の音なのか箏の琴と和琴の合奏なのか、そしてその音色が「にぎははしく」なのか、あるいは合奏が

36) 伊東祐子(1983)『「青表紙本」と「河内本」について－作中歌を中心に－』『学習院大学国語国文学会誌』26, p.15

37) 北村季吟著 / 有川武彦校訂(1982)『源氏物語湖月抄増注』講談社, p.484

38) 伊東祐子(1983), p.17

39) 池田龜鑑(1982), pp.387⑩-388④

「よしよしいう」なのかというところで両本文に違いがある。『湖月抄』では、「よくなることを、あづまにしらべてかきあはせ、にぎははしくひきならすなり」⁴⁰⁾と青表紙本系統の本文になっている。新編全集も本文を「よく鳴る琴をあづまに調べて掻き合はせ賑はしく弾きなり」とし、『『よく鳴る箏の琴にあづまをしらべ合せて』とある河内本の本文を参照して、音のよく出る箏を和琴(ルビ：あずま)の調子にして、と解するのが通説。一説には、和琴そのものについていうとする」⁴¹⁾と頭注を付けている。要するに、本文は青表紙本に依っているが、楽器は河内本にならって箏の琴と和琴の合奏と解釈しているということである。

このように『源氏物語』は異文が多数存する文学であるため、どの本文を底本とするかによって訳文に影響を及ぼすことになる。そして重訳の場合でも、底本テキストがどの本文を採択して現代語訳をしたかによって、重訳の翻訳もそれに従うことになる。だからこそ、訳者は翻訳の際に何を底本として訳したのか、またその底本はどんなテキストであるかということを読者に明確に提示することが求められる。

4. おわりに

以上、2013年12月現在の韓国語訳『源氏物語』の出版状況の概要をまとめ、その翻訳上の諸問題について考察した。韓国における『源氏物語』の翻訳状況としては、先行研究に見られた誤情報を改めるとともに、これまで把握されなかった韓国語訳の情報を加えた。そして韓国語訳における諸問題としては、一般的にすべての日一韓の翻訳者の抱える問題点を概略的に示した上で、『源氏物語』が定本の存しない古典文学であるがために生じる問題について考察を加えた。

現在まで韓国語に翻訳された『源氏物語』にはまだ原典からの翻訳はなく、日本古典文学全集の原文と現代語訳、与謝野晶子と瀬戸内寂聴による現代語訳からの重訳であるが、各々の翻訳本において、重訳についての訳者の意識が非常に希薄であることを指摘せざるを得ない。抄訳よりも完訳の方がより原典と底本テキストと翻訳という問題が重要であると言えるが、3種とも底本テキストの提示や翻訳の忠実さの面で問題がみられる。柳呈氏

40) 北村季吟著・有川武彦校訂(1982), p.564

41) 『源氏物語2』新編古典文学全集(1995), p.154

は、日本文学大系『源氏物語』を底本テキストとしたと述べているが、実際は与謝野訳を重訳している。一方金欄周氏は、瀬戸内訳の重訳であることを示しながらも本の背には「瀬戸内著」と記している。さらには、瀬戸内訳における図録などの作成者名やその扱い方に問題がみられる。田容新氏の訳は底本テキストは明示しているが、底本テキストに忠実な訳ではないところがみられるという問題がある。柳氏の後に次ぐ2種の完訳本は共に先の韓国語訳に批判を加え自らが韓国初の完訳本であることを強調しているが⁴²⁾、韓国初の完訳であることを声高に主張することより、翻訳の際に用いた底本テキストを偽りなく明確に示すことの方がより大事であろう。特に原文からの翻訳ではなく重訳である場合は、おのずと原典と重訳間に隔たりが生じ、その間に重訳の底本テキストが位置することになる。したがって、重訳は、原典から一度翻訳(現代日本語訳や他言語訳)されたものを、さらに重訳をするという過程を経ることになるが、重訳の訳者は原典ではなく、その原典を翻訳したものを底本テキストとするので、どの翻訳を底本にするかによって、作品の内容や解釈などに違いが生じるようになる。これは、現代における重訳の場合も共通して生じる問題であるが、『源氏物語』の場合は、原典の定本が存在しないために、重訳の底本テキストが何であるかによって、より様々な違いが生じるのである。

仮に金欄周氏が現代日本文学である江國香織の作品を翻訳するとした場合、その底本に揺れが生じることはない。原作者の江國香織が著作権をもち出版されたその作品をほかの誰かが手を加えることは許されないからである。したがってその江國香織の原作を韓国語なり英語なりどんな言語で翻訳しようと、さらには誰が翻訳しようと、その底本となる本文は、まったく揺れないもので、句読点も改行までも揺ぎないものになるのである。そこが現代文学の翻訳と定本の存しない古典文学の翻訳の大きな違いであり、その違いがあるからこそ翻訳に対する訳者の姿勢も、また翻訳の在り方も変わる必要があるのではないか。

『源氏物語』は、原作者による揺ぎない本文というものが存在しない文学であり、作者も紫式部であるとするが、現存する54帖すべてが彼女の手になるものであるという根拠は乏しいかぎりである。さらに平安時代に書かれた本文には、漢字も当てられていなければ、句読点も改行も付されていない。そして『源氏物語』は千年にわたり源氏読みが為され、本文にも後世の読者や研究者により手が加えられることによって異文が生じてきたのである。現代文学であればそのように異文が存在するはずもなく、作者オリジナルの本文でな

42) 田容新(1999), p.8、金欄周(2007), pp.378-379

いものは一切意味を為さないが、『源氏物語』の場合は、その異文すらも『源氏物語』の享受史としての重要な足跡なのである。だからこそ、『源氏物語』を翻訳するという行為は、それこそ過去にも揺れ、現在も揺れ続けている「揺れ動く『源氏物語』」⁴³⁾の享受史の中の、ある一時における、一つの源氏読みを読者に提供する行為にほかならない。だからこそ訳者は、どの本文を用い、どの注釈を参考にして訳したのかを明らかにする必要があるわけである。そして本文や解釈をほかに委ねたなら、それを明示し、その底本テキストに忠実に訳さなければならない。翻訳された『源氏物語』が、訳者自らの「源氏読み」を訳したものであるのか、底本に従ったものかを明確にしたほうが訳者にとっても誤解を招かず済むということ、『源氏物語』の訳者は認識すべきであろう。

そこで本稿では、『源氏物語』のように唯一の原文がなく異本のある古典文学を現代語に重訳するに当たって、訳者は、一般的な翻訳技法に加え、特に次のような点に注意を払い翻訳すべきであることを提言したい。

- 1) 底本テキストの明確な提示
- 2) 底本テキストに忠実な翻訳
- 3) 作品理解に必要な背景的知識の提示

1)は現存する諸本の校訂から始めない限り、訳者は翻訳対象とした底本を明確に提示する必要がある。2)の場合は、本文の忠実な翻訳はもちろん、瀬戸内訳の参考図録の作成者名のように底本テキストが示しているものは漏らさずきちんと示すべきである。3)は、特に起点言語や文化の独自性を保ったまま翻訳する際に必要なことである。『源氏物語』のような文学作品を、注釈も説明も要らないほどに、しかも起点言語や文化の違いをまったく感じさせないように訳すことは至難の業である。それならば、作品理解に必要な背景的知識を読者に提示するのが、翻訳という行為を通して原作と異国の読者の間に立つ翻訳者の使命ではなかろうか。柳呈氏は、新装版において詳細な解題を付しており、この点についての訳者としての意識は高く評価できる⁴⁴⁾。柳氏にくらべて田容新・金欄周訳は、この部分の意識が希薄であると言わざるを得ない。もちろん定本の存しない古典文学の翻訳におい

43) 加藤昌嘉(2011)揺れ動く『源氏物語』勉誠出版, p.1

44) 但し、柳氏が解題を置いたことは高く評価されるが、その解題の内容が池田弥三郎氏の解説に拠ったものであることを明示していないことは残念なことである。それは訳者として、上の1)の部分疎かにしたためであることが指摘できよう。

ても、翻訳の目的や対象とする読者層によってある程度の差はあつてしかるべきである。しかし、いかなる場合においても訳者は、その目的と読者層に見合った形で背景知識を提示することにより異文化読者の理解を助け、自らの翻訳の基盤を為す底本についても偽りなく、十分に示す必要があることを認識した上で古典文学の翻訳に取りかかるべきであろう。

【参考文献】

- 金蘭周(2007)『겐지이야기』한길사(ハンギル社)
 金鍾徳(2008)『겐지 이야기』지만지(ジマンジ)
 文明載(2007)『겐지 이야기』웅진씽크빅(ウンジンシンクビック)
 朴光華(2008)『源氏物語韓訳 濤標』日本文学研究会
 柳呈(1979)『겐지(源氏)이야기』을유문화사(乙酉文化社)
 李吉鎮(2009)『겐지 이야기』AK커뮤니케이션즈(AKコミュニケーションズ)
 林瓚洙(2005)『겐지모노가타리』살림출판사(サルリム出版社)
 田溶新(1999)『겐지이야기』나남출판(ナナム出版)
 北村季吟著 / 有川武彦校訂(1982)『源氏物語湖月抄 増注』講談社
 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳 (1995)『源氏物語 2』新編古典文学全集、小学館
 与謝野晶子(1971)『全訳源氏物語』角川書店
 谷崎潤一郎(1964)『新々訳源氏物語』中央公論社
 円地文子(1972)『源氏物語』新潮社
 瀬戸内寂聴(1996)『源氏物語』講談社
 権妍秀(2004)『平安時代女房研究』『東アジア日本学会日本文化研究叢書25』보고사(ボゴ社)
 加藤昌嘉(2011)揺れ動く『源氏物語』勉誠出版
 김수미(2013)『『겐지모노가타리(源氏物語)』공간표현의 한국어역 고찰-히사시(廂)・하시(端)를 중심으로-』『일본연구』제57호
 金鍾徳(1992)『韓国における源氏物語研究』『源氏物語講座 9』勉誠社
 _____(2008)『柳呈と田溶新の韓国語訳について』『源氏物語の現代語訳と翻訳(講座源氏物語研究)12』おうふう
 _____(2009)『겐지이야기(源氏物語) 번역과 연구』『통번역학연구』제12권 2호
 朴光華(2004)『翻訳の基礎的な問題点について—『源氏物語』韓訳の場合』『海外における源氏物語の世界』風間書房
 李芝善(2007)『韓国語訳『源氏物語』における巻名の訳し方について』『日本アジア研究』4
 최현무(1995)『문학작품 번역의 몇 가지 문제점』『오늘의 문예비평』
 한정미(2011)『겐지모노가타리의 한국어역-김난주역 겐지이야기를 중심으로』『일어일문학연구』제76집
 井上英明(1989)『海外の源氏物語』別冊國文学36 學燈社
 伊藤鉄也(2009)『『源氏物語』の翻訳状況』『総研大ジャーナル』15
 伊東祐子(1983)『「青表紙本」と「河内本」について—作中歌を中心に—』『学習院大学国語国文学会誌』26
 伊藤好英(2009)『柳呈による韓国語訳『源氏物語』の「本文」「解説」「注釈」について』藝能

北村結花(1992)『『源氏物語』の再生—現代語訳論』『文学』3巻 1号

杉山香織(2009)『『トランスレーション・スタディーズ』と日本における翻訳研究の展望』『言語・地域文化研究』15

田中幹子(2010)『韓国語訳『源氏物語』における解釈上の諸問題について—『桐壺』巻(1)』『比較文化論叢』25

_____ (2011)『韓国語訳『源氏物語』の巻名について』『札幌大学総合研究』第2号

_____ (2011)『金蘭周訳『源氏物語』から見る現代語訳『源氏物語』の問題点について—「若紫」「紅葉賀」—』
『札幌大学総合論叢』第31号

Edward G. Seidensticker (2004) “Translation: Old Problems Revisited” 伊井春樹編『国際化の中の日本文学研究
国際日本文学研究報告集1』風間書房

논문투고일 : 2013년 12월 10일

심사개시일 : 2013년 12월 20일

1차 수정일 : 2014년 01월 09일

2차 수정일 : 2014년 01월 15일

게재확정일 : 2014년 01월 20일

 <要旨>

韓国語訳『源氏物語』についての一考察

- 古典文学翻訳の在り方と底本の問題をめぐって -

本稿は、韓国における『源氏物語』翻訳の現状を通して古典文学翻訳の在り方と底本の問題を考察したものである。1882年末松謙澄による抄訳『Genjimonogatari』がイギリスで出版されてから130年、現代においても『源氏物語』は新たな読者を開拓しつつ世界の人々に読み継がれ、その翻訳された言語は現在36の言語にのぼる。韓国においても『源氏物語』は、1975年初めて翻訳されてから3種の完訳をはじめ計8種の韓国語訳が出版された。そこで本稿では、各論稿に見られる誤記などを改めるとともに、まだ把握されていない韓国語訳本も加えて、2013年現在の出版状況と書誌を「韓国語訳『源氏物語』一覧表」としてまとめ提示した。その結果、共通して把握されている田沼新訳・金蘭周訳・金鍾徳抄訳のほか、研究者によって書誌に誤情報のあった柳呈訳と、一人の研究者にのみ把握された林瓊珠訳の書誌を改めるとともに、本稿で初出となった文明載抄訳と李吉鎮訳『あさきゆめみし』に加え、2013年12月現在の韓国語訳『源氏物語』を網羅して把握できた。今後の韓国語訳『源氏物語』研究のための基礎的な研究になるものとする。

その次に、定本の存しない外国の古典文学である『源氏物語』を韓国語に翻訳する際の問題点を「日・韓の言語差による問題」と「翻訳と底本テキストの問題」という観点から考察した。特に後者においては、古典文学の翻訳における底本の重要性という根本的な問題と関連付けて韓国語訳底本の問題を考察した。原作者による原典からの翻訳と一度原典からの翻訳過程を経たテキストを底本として重訳する場合には、訳者の翻訳に対する姿勢は変わってしかるべきであることと、重訳の場合は原典テキストの作家とともに底本テキストの訳者の存在が作品に大きな影響を与えることになるので『源氏物語』のような定本の存しない古典文学の翻訳を考えるに当たって大変重要なことであることを具体例を挙げ指摘し、翻訳の際の訳者の姿勢と定本の存しない古典文学翻訳の在り方について考察を加えた。

最後に、古典文学翻訳における底本の問題は訳者の姿勢とも関わる問題であるので、今後新たに『源氏物語』が韓国で翻訳される際に準拠し得る提言を示した。すなわち、『源氏物語』のように異本の存し、その異文も作品の享受史としての重要な足跡となる古典文学を重訳する際には、一般的な翻訳技法に加え、1)底本テキストの明確な提示、2)底本テキストに忠実な翻訳、3)作品理解に必要な背景知識の提示、という点に注意を払う必要がある。翻訳者はこのような認識のもとに、翻訳本の目的と読者層に見合った形で背景知識を提示するなど異文化読者の理解を助け、自らの翻訳の基盤を為す底本についても偽りなく、十分に示した上で古典文学の翻訳に取り掛かることが望ましいと考えられる。

A Study of Korean translation for “Tale of Genji”

 - Concerning the problem of original text and the nature of modern translation
of classical literature -

This paper is one in which we considered the problem of original text and the nature of classical literature translated through the current situation in Korea of “Tale of Genji” the translation. The abridged translation by Suematsu Kencho “Genjimonogatari” has been published in the United Kingdom 1882 year-end. It passed 130 years after that, Tale of Genji has been translated into 36 languages now. The Tale of Genji will be translated for the first time in 1975, and eight sorts of translations including the complete translation of the three, are published as of December, 2013 even in South Korea. In this paper, I summarize the current state covers the Korean translation of “The Tale of Genji”. To the next, in terms of “problem of original text and the translation” and “problems due to language differences between Japanese and Korean” problems when translated into Korean classical literature of foreign non-existence of authentic book the “Tale of Genji” I discussed from. In conclusion, in addition to the translation technique general, translator classical literature, 1) A clear presentation of bibliography of original text, 2) A loyal translation to the original text 3) presenting of background knowledge necessary to understand for foreign readers.